丸尾信二は午後一時きっかりに事務所に入る。彼のパンクチュアリティは高い。何しろ時の神様が司る仕事をしているからには、自分も時を大切にしないと、安心して仕事に専念できない。午後一時、古い雑居ビルの一階に借りた事務所に入るとお茶を淹れて心を鎮めてから、郵便とファックス、加えて電子メールをチェックし、一日の流れを組み立てる。午後二時に看板「丸尾信二事務所」を表に出す。受付と接客が始まる。予約客も直接来店の客も、二〇分で済む客も、一時間以上かかる客も、様々な客が来る。話を聞き、必要なアドバイスをする。お説教はしないように注意している。午後八時に受付を締め切って、午後九時前に最後の客を送り出すと、その日の営業は終わりだ。早ければ午後九時過ぎ、遅くても十時半頃には事務所を出る。木曜から日曜まではこうして過ごす。カント程ではないが、判で押したような営業の日々である。

月曜は講習会の講師を引き受けている。だから、残りの火曜と水曜が休日だ。趣味のフルートを奏

でたり、知人と食事をしたり、散歩や買い物も楽しむ。気になることがあると、内外の専門書で仕事に関する研究もする。目的がない時間が出来て使い道を思いつかないと、目的がないということを目的とする時間を設定する。待ち時間は苦手であるという自覚はある。

であるにもかかわらず、客を待つ商売を選んだのは何の因果か、というのは一人で事務所にいると、時折出る口癖である。それが出るたびに、自分が選んだ職を考え、時計に目をやってから、書類や専門書に目を落とす。それが自分を律する唯一の絆なのだと言い聞かせる。

だから、既に春の潤みを含んで豊かな陽射しに溢れていたその日も、事務所に入り、デスクについて忙しく働き、客をさばいていた。口癖が出たのは、たまたま午後六時半で客足が途絶えた時だ。この時刻では珍しく、少々幸せな気分を味わうことにする。立ち上がって高山烏龍茶を淹れ、香りに少しだけ酔う。茶碗は淡い青緑に満ちて微かに湯気を立て、口に含めばさらりと涼しい後味が鼻から脳天へ抜ける。

上機嫌でメールをチェックするが、特に返事が必要なメールもなく、本棚から仕事の本を取り出そ

うと指を走らせた。指は止まらずに、デスクに戻って鞄から読みかけの「言語と脳科学」を取り出した。仕事柄、心をとりまく諸問題についての情報収集は欠かせない。茶を啜りつつ読み進めていく。

序論を経てやっと言語学と脳科学の関わりに触れたところで、ふと目が本から離れた。細長い部屋は飲食店に狭すぎても、個人事務所には快適だ。その奥、客を迎えるデスクに着いた丸尾から見て、右には本棚とロッカー、その脇にはタペストリー。反対側の壁にかかる時計。丸尾の背後には、カレンダーが存在するはずだ。シンプルな、いつも通りの事務所である。

時を刻む硬い音は、時計からの直接音と壁に反射する間接音とが微妙に違う硬さで耳に到達する。音が外界の気配を圧倒する。微かな緊張を覚えた瞬間、ほとんど自動的に手が左前方のパーソナルコンピュータに伸びていた。

画面にはシンプルな図が表示される。円内に記号が散らばり、中心から放射状に伸びる直線が円を十二分割している。天球図を黄道で輪切りにして、二次元の円に射影したそのチャートには、太陽に月、太陽系惑星などが記されている。

「まだ客は来そうだな…いや、これは客じゃないか」

呟きざま、一度戸口に目をやる。特に事もないそこから目を離し、再び本に戻した。

どれくらい経ったか。外界の音、商店街のＢＧＭが微かに飛び込んできた。戸が開いたのだ。小さく開いたそこに、卵形の小さな顔が覗いていた。

「あのぅ、まだやってますか」

顔立ちにしては意外に低い声に時計を見ると、七時と四十分を過ぎようとしている。

「だいじょうぶですよ、どうぞ」

白くつややかな顔、細く真っ黒な瞳がはにかんで、身体を屋内へ連れ入る。静々と白いストレートのジーンズが歩み、デスク前で止まった。クリーム色の上着を脱ぐと、空色をさらに淡くしたセーターが細身の彼女を引き立てている。

「はじめてなんですけど」

「どうぞ」と手で椅子を勧めつつ、丸尾は見上げる「まずはこちらにご記入ください。表の料金表は